

映画上映会

# 「新渡戸の夢 学ぶことは生きる証」

新渡戸 稲造

東京都推奨映画

新渡戸が創った夜間中学「遠友夜学校」を題材に、今日への影響をたどるドキュメンタリー映画の上映会です。  
当日は、野澤和之監督と並木秀夫プロデューサーにご登壇いただきます。

日程 7月23日 (木) 15:20 ~ 18:30

会場 聖学院大学チャペル  
さいたま上尾キャンパス

対象 一般（高校生以上）・本学学生・教職員

参加費 無料

申込 聖学院大学総合研究所HP  
<https://www.seigakuin-univ.ac.jp/institution/gri/>  
または右のQRコードよりお申込みください。  
※申込締切は、7月15日（水）です。



## 交通アクセス

埼玉県上尾市戸崎1-1

JR高崎線宮原駅からスクールバス約5分 / 徒歩15分

JR埼京線（川越線）西大宮駅からスクールバス約10分

JR埼京線（川越線）日進駅から徒歩15分



※当日はスクールバスに無料でご乗車いただけます。  
※一部循環（宮原駅発西大宮経由大学）バス（約20分）があります。  
※車でのご来校はご遠慮ください。

お問合せ 聖学院大学総合研究所  
TEL 048-725-5524

<https://www.seigakuin-univ.ac.jp/institution/gri/>  
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1  
E-mail [research@seigakuin-univ.ac.jp](mailto:research@seigakuin-univ.ac.jp)

主催：聖学院大学総合研究所  
グローバルゼーションと日本文化研究  
共催：新渡戸の夢映画製作委員会  
聖学院大学キリスト教センター  
聖学院大学人文学部日本文化学科

# 新渡戸稲造の問学

“学問より実行”

新渡戸稲造が1931年、遠友夜学校を訪れた際に残した教育方針

## 新渡戸稲造（にとべいなぞう）と「遠友夜学校」

1862年（文久2年）～1933年（昭和8年）、享年72。現在の岩手県盛岡市、南部藩士・新渡戸十次郎の三男として生まれる。米国で出版された『BUSHIDO The Soul of Japan』（邦題：『武士道』）の著者として知られる新渡戸は、大学教授や学長を務め、教育者としての業績を残している。新渡戸が32歳の札幌農学校教授時代に、貧しくて学校に通えない人々のために妻メリーと始めたのが「遠友夜学校」である（1894年／明治27年）。生涯で唯一、新渡戸が創設した学校で、授業料無料・男女共学で年齢制限なしという当時としては画期的な学校であった。1944年（昭和19年）の閉校まで50年間で約1,170人が卒業し、富や名誉より人格形成を重んじた教育が行われた。



写真提供：北海道大学大学文書館

## 受け継がれる遠友の精神

「遠友夜学校」に込めた新渡戸稲造の想いは、現在どう継承されているのだろうか？その答えを探るドキュメンタリーの旅が始まる。「遠友夜学校」の卒業生は誰も生存していない現在、その痕跡を求めて卒業生の子供たちに出会い、父母から聞かされていた「遠友夜学校」の生活を彼らが語り始める。北海道大学にはボランティアサークルとして市民講座「平成遠友夜学校」が開設され札幌市民に門戸を開いている。また1990年に「札幌遠友塾自主夜間中学」が開校され、遠友夜学校の精神を今に受け継いでいる。教育を受けることができなかつた人たちが、学ぶことで自己を取り戻し、夢や希望を叶えている姿が美しい。

学ぶことが生きる証と喜びになっている。東京では、子供たちに新渡戸の精神を伝える「こども武士道」の教室が開かれ、130年前に創られた小さな夜学校の教育が現代に蘇っているかのようだ。今をどう生きればいいのか？映画には、そのヒントが散りばめられている。

## 受け継がれてかけられる教育の橋

聖学院大学人文学部日本文化学科 杉淵洋一准教授

新渡戸稲造が言ったとされる言葉の代表的なものひとつとして、「橋はひとりではかけられるものでない。世代を超えて受け継がれてかけられていくものなのだ。」というものがある。しかしながら、この言葉の典拠について、新渡戸の著作の中からは見つけることが出来ない。つまり、この言葉は生前の新渡戸の言動や人となりなどから作りあげられた、人々が抱いた新渡戸という人間のイメージを象徴する言葉と理解することができる。

ドキュメンタリー映画「新渡戸の夢～学ぶことは生きる証～」は、新渡戸が始めた教育の橋をこの国の隅々にまでかける作業が、多くの後進に受け継がれ、今日においてもその作業が続けられていることを私たちに実証的に教えてくれる、教育に本当に必要なことを私たちに考えさせてくれるたいへん示唆に富む作品といえる。

新渡戸が抱いた教育弱者への教育の必要性は、教育が教師から学生へと一方的に与えられるトップダウン型のものではなく、学生たちに教育の大切さをここんと説いていくことによって、「学び」というものが個人の人格を形成し、人生を切り拓き社会を担っていく、主体的な生命活動であることを実感させる点にあったのであり、本映画で描かれる教師と学生たちとの関係は、新渡戸のその狙いを的確に浮かびあがらせるものとなっている。バランスを欠いたグローバルゼーションや国内の歯止めのかからない少子化によって、これまでの教育による子どもたちへの指導が立ち行かなくなってきた中で、この映画の中にはこれからの教育において必要な未来のためのヒントがたくさん隠されているような気がしてならない。